

# 吉原遊郭における客と客

Relationships of visitors to *Yoshiwara*

高木まどか

〈abstract〉

This article examines the relationships of the visitors to *Yoshiwara of Edo*, using *Yujo hyo-banki*, which is one of the classifications of a story book, *Kanazoshi*, in this paper.

I have focused on *Yoshiwara* in the preceding study to demonstrate the view that brothels were blocked off from real society. I have verified how a visitor's status was handled in *Yoshiwara* and have argued concerning the logical involvement in *Yoshiwara* and the general public. As a result, there was certainly the situation that status order outside *Yoshiwara* was excluded in the brothel district. Meanwhile, it became clear that some visitors were avoided or rejected due to their status. Even inside *Yoshiwara*, logic outside *Yoshiwara* made sense.

The past argument did not discuss how visitors were involved with each other and how the norm outside *Yoshiwara* was brought inside *Yoshiwara*. Taking into account this issue, in this paper, I would like to discuss the interpersonal relations of visitors in *Yoshiwara* as a fundamental discussion for clarifying the norm involvement inside and outside *Yoshiwara*, and the circumstances of avoidance or rejection of certain visitors.

In considering these, I treat *Yuhoho hyo-banki*, which is one classification

of a story book in *Kana*, as the primary historical records. Although *Yujo hyo-banki* is writing that makes a prostitute's reputation, there are some which describe in detail the position of a visitor inside a brothel. This writing observes and knows a visitor's actual conditions in brothel districts. In this paper, I verify about visitors in brothel districts, by mainly focusing on Yoshiwara from the second half of the 17th century to the middle of the 18th century, which has many descriptions about visitors in *Yujo hyo-banki*.

## 目次

はじめに

第一章 連れ立って廓に通うこと

第二章 座における客と客

第三章 「さし合」をめぐる客の問題

第四章 一人通いからみる吉原

おわりに

註

## はじめに

廓において、客は他の客をどのように意識し、どういった関わり合いをもっていたのであろうか。その一端をうかがえる廓の取決めに、「さし合」がある。

「さし合」（差合・指合とも）は目当ての遊女に先客がいた場合のことも言うが、客同士の間係で注目されるのは『色道大鏡』（延宝六年（一六七八）序）巻第一「名目鈔」に「おもひよる傾城をかはんとするに、其女の知音と近付なれば、さし合といひてうらぬ法な

り」<sup>(一)</sup>とある、遊女の馴染み客（知音）と親しい客に、その遊女を売らないようにする決まりである。同書ではまたさし合について「連哥にても、俳諧にても、おもひよる趣向ありて付んとするに、さし合あれば付えざる也、此心とひとし」<sup>(二)</sup>と、連歌俳諧の差合と等しいとあり、廓における客の関わりの複雑さがうかがえる。

この「さし合」はすなわち、廓の外の間関係が廓内に持ち込まれたがために生じた取決めであろう。これまで筆者は、廓は身分等が取り払われた「公平に通用する世界」であり、「現実を遮断した特別な社会」<sup>(三)</sup>として役割を果たしていたという見解を示す西山松之助等の先行研究に注目し、客の身分が廓においてどう扱われたかを検証することで、廓内と廓外（西山の言う「現実」）であり、社会一般の論理の関わりについて検証を行なってきた<sup>(四)</sup>。この結果、廓では確かに廓外の身分をひけらかすような客を笑う状況があったものの、一方でその身分によって、客として忌避あるいは排除されたと考えられる者も存在したことが明らかにになった。すなわち、廓内においても廓外の論理は

当然意味をもったのであり、先行研究における廓<sup>II</sup>「現実を遮断した特別な社会」という見解は、廓の一つの側面を強調した言説にすぎないということができるのである。

身分秩序とは異なる位相の例ではあるものの、先に挙げた「さし合」も、同様に客の關係という廓外の論理が廓内に持ち込まれたことを示す例であろう。したがってこのさし合の概念はもちろん、廓外でのどのような客同士の關係が廓内でさし合を生じさせることになったのかを検証することは、廓内外の規範の関わりを明らかにするにあたって意味のある議論となる。

また、客同士のあり方についての検証は、廓内外の規範の関わりのみならず、一部の層が客として排除された経緯を考察するにあたっても、重要な意味をもつ。それは、一部の層の排除が、店やそこで働く遊女というよりも、むしろ他の客によつてなされたと考えられるためである<sup>(四)</sup>。しかしこれまでの拙稿においては、そもそも客が他の客をどのように意識し、どういった関わり合いをもったのか、あるいはもたなかったのかという客同士の関わりについて、十分な検討を

行なえてこなかった。本稿ではこのような問題意識のもと、廓内外の規範の関わり、および一部の客の忌避・排除の経緯を解明するための基礎的考察として、廓における客同士の関わり方について議論を行なっていくこととしたい。

これらを論じていくにあたって本稿で主な素材とするのは、これまでも拙稿において注目してきた遊女評判記である<sup>(五)</sup>。遊女評判記とは寛永年間から宝暦五年（一六二四—一七五五）までに刊行された仮名草子の分類の一つであり、狭義には遊女の批評を主とする書を指すが、広義には遊里関係書全般を指し、本稿ではこの広義の意味で遊女評判記を扱う。総数約二一〇種（実際に刊行したか不明なものも含む）の内、約一〇〇種が伝存し、伝存約一〇〇種の地理的内訳は、吉原が約六〇種、島原が約二〇種、大坂新町が約一〇種、その他が約一〇種と、吉原を対象とする書が圧倒的な数を占めている。評判記の作者は多くの場合、遊女を買う立場、つまりは客であったと推測される。評判記には作者自身の告白的記述や他の客とのやりとりも少なからず記されており、そういった意味で遊女評判記

は、本稿の関心とする実際の客の関わりを明らかにするにあたって有用な史料である。但し遊女評判記の内容や、執筆の意図はそれぞれ異なるため、扱う遊女評判記の位置付けについては適宜本文中で触れることとしたい。

また議論の対象とする遊郭は、遊女評判記からよく状況のわかる、宝暦頃までの江戸新吉原とする。江戸の遊郭吉原は元和四年（一六一八）、現在の中央区日本橋人形町二・三丁目付近に創設されたが、明暦三年（一六五七）に浅草日本橋堤（現台東区千束四丁目）に移され、移転前が「元吉原」、移転後が「新吉原」と呼ばれるようになった（但し本稿では必要がある場合のみ「元吉原」と「新吉原」を区別し、特に注記のない場合は「新吉原」を「吉原」と略記する。）。対象年代の区切りとする宝暦は、元吉原時代から続いていた揚屋（高級遊女を呼んで遊ぶ店）が消滅する一方で岡場所が隆盛するという、新吉原退潮の兆しが見え始めた頃である。遊女評判記も宝暦五年（一七五五）刊の『吉原出世鑑』を区切りとし、以後は洒落本、細見・名寄せに形を変えた。この間の客層は雑多であり、ま

た遊女評判記にも作者自身のことも含め身分についての明記は少ないため、史料にあらわれる「客」がどの層を指すかはつきりと提示することはできない。この点については今後より詳しい検討を行なっていく必要があるが<sup>(六)</sup>、本稿においては、わかる範囲で適宜客層およびそれにもつわる廓の時代的背景を記述していくこととしたい。また引用史料中の括弧と傍線は引用者による。

## 第一章 連れ立って廓に通うこと

客同士の関係を考えるにあたって、まずはじめに客がどのように吉原に足を踏み入れたかをみていこう。奥平市六著（推定）の『吉原すゝめ』（寛文七年〔一六六七〕刊）には、廓通いをするきっかけについて次のように記されている。

いにしへより、遊女にたはふる、者は、きはめてかしこきと、至ておろかなるとのわざなりといひつたへぬれど、それにもかきらすと見へたり。さ

れは、まづ友にいざなはれてかの道に入事、おほかたの人のならひ也。(七)

すなわち、昔から遊女遊びをする者は「きはめてかしこき」と「至ておろかなる」者だと言われるが、それに限らず、多くの場合友に誘われることが廓遊びのきっかけとなったことが記されている。この『吉原すゞめ』は新吉原創設から十年程経た頃のものであるが、この頃は新吉原における客の大衆化が進んでいた時期である。それは、元吉原では夜売りが不許可であったのに対し新吉原では夜売りが許されたため、昼に遊んだ武士以外の客も廓に通うようになったためとされる。吉原を対象とした遊女評判記の刊行が本格化したのもこの頃であり(八)、「おほかたの人のならひ」といった記述からも、既に廓通いがある程度大衆化しており、そしてそのきっかけとして何よりもまず「友」があるという認識がうかがえる。同書には他のきっかけとして「子をしかり、弟をいましめ、しんるい、ほうゆうにいけんをなさんとて」、つまりは誰かしらを叱ろうと足を踏み入れた筈が結局自らが染まってし

まったという例や、「ふく人の、子のおろかなるをかなしみ、かのみちにも入なは、くがい(公界。遊女勤め)をも見ならひ、ものいひ、さしあひもよからんなど思ひて、友をたのみ、つれをもよほしてかいならば」すといった、裕福な親が子供を世慣れさせるために通わせたり、「下／＼にそ、のかされて」、「主人にともなひて」、「かしら、奉行をなぐさめんとて」、すなわち日常的な主従関係をきっかけに足を踏み入れるといった例がみられる(九)。他に、花見・舟あそびの帰りに立ち寄るといった例の他、通な客の姿をみて染まるという廓の特殊性に惹かれる例も挙げられているものの(一〇)、多くは右に挙げたような廓外の日常的な人付き合いがきっかけとなり、廓に足を運ぶ客となった様子が見られる。

但し、廓遊びが大衆化したとはいえ、このように人付き合いに任せ廓に通うか否かは、当人の選択であった。しかしその選択は、男性同士の友人付き合いに影響を与える選択でもあった。同書『吉原すゞめ』には「その道にかゝるとし(同士)」は、「よりあひこそぞり、兄弟のごとくかたりなぐさめ」るが、「道にいらぬ友」

は、「こぶんしんほう（古文真宝。堅苦しいさまやその人。）と名付て、まけ／＼かいてすてよなと、て、わかきもの、のつきあいま、をのつからやむやうになりゆく」ため、「ふしやうにも、かわんと思う心の出くる」<sup>(一)</sup>等とあり、廓遊びを共有しない者が悪口を言われ、日常的な仲間付き合いから弾き出される状況があったことがわかる。同様の記述は京都島原を対象とした遊女評判記『難波物語』（明暦元年（一六五五）刊）（著者未詳）にもみられ、遊郭に「一座のたはふれの躰」で「一度二度は、男の見るべき道と思ひ」足を向けたり、「話より心おごり（人の話を聞いて興奮し）、あるひは友にいきらかされ（唆され）、あるひは、きたなびれぬ（卑しい真似をする）ためとおもひ、或はおさめたる（大人ぶっている）と人はいはれんもいやさに、しめて求めて、座につらね」るような者もいたことが記されている<sup>(二)</sup>。こういつた遊郭にまつわる考え方が各地でいつ頃形成されたかについては検証を要するが、少なくとも江戸において寛文頃には、吉原が男性仲間のあり方に影響を与える場とみなされていたことがうかがえよう。吉原は必ず通わねばなら

ない場所でなかったが、中にはそれを志向しない場合であっても、男性同士の仲間関係を慮って足を運ばざるを得ないような状況があったのである。

このように廓通いが周囲との関係性に影響したことからわかる通り、ふつう廓遊びは誰かを誘い、共に行うものであった。先に挙げた『吉原すゞめ』の作者も、書名のとおり「吉原すゞめ」、すなわち自ら金は出さず大臣客に付き従って遊ぶ客であったと推測されている<sup>(三)</sup>。それでは、廓通いはどれくらいの人数を伴い行われるものであったのだろうか。『徒然草』の注釈本『徒然草鉄槌』を模した評判記『吉原失墜』（延宝二年（一六七四）刊）では、廓に通う人数について「つれ多からず（略）ざしきにあそびたるばかりなくさむ（慰む）事はあらじ」と、まず本文で連れが多くないことが肯定されており、当該文に対する註として「たまさかなる一座などは、つれがいのおほくさわぎたる、おもしろきものなれ」と、偶然一緒になった一座は大勢で騒いだ方が面白いが、「水法（粹）なるやつらは一あるとも、二三人連れこそ、しつぽりとすれと申侍る。またある人申されしは、つれなく一

人しつほりと出たるこそ、おもしろきと申されし、珍重く(二四)と、粋な客たちは二三人連れでしつほりと行くのが面白いと言い、中には一人で行くことこそ面白いと言う者もいるが、それは珍しいといった見解が記されている。本書の作者「油虫朝臣濡高氏勘太郎」〔頓敵朝臣ふくべ氏十太郎〕(共に未詳)は粋を理解する人物であったと想定されるが(一五)、先の引用では「水法なるやつら」と粋を突き放すような書き方もされており、両者がどのような通い方を肯定しているかは明確でない。いずれにせよ、最良とする人数は異なるものの、一人で通うことは珍しいとみなされ、多くの場合客は連れ立ち吉原へ通った様子がかがえる。すなわち客は廓に足を踏み入れる段階から、廓外の日常的な関係を引き摺っていたといえる。

以上本章でみてきたように、客は日常的な人間関係をきつかけとして、吉原へ足を踏み入れるのがならいであった。尤もそれは必ずしも望んだ結果ではなく、廓に通う選択には男性の仲間関係など、周囲からどうみられるかという背景も存在した。同様に客が周囲の目や関係性を意識し振る舞ったであろうことは、酒宴

の座(宴席)における客の関係からもうかがい知ることができる。次に、この座における客同士の関わり合いをみていきたい。

## 第二章 座における客と客

吉原通いが多くの場合日常的な人付き合いからはじまったとはいえ、廓において知らない客同士が新たに知り合う機会が存在しなかったわけではない。その機会の一つとして、本章で注目する座(宴席)がある。先にも挙げた寛文七年(一六六七)刊の『吉原すゞめ』には、「又、五三人の一座のうち、しよたいめんの男の、はなす(買う)女郎に、つれの近づき有は、よしあし也」(数人の一座になった時、初対面の男が話す女郎に近づくのは善し悪しである)(二六)と、座で初めて会う男とその遊女に関する心がけが記されており、知らない客と座を共にする状況があったことがうかがえる。他の客が座に立入ったことは、宝永六年(一七〇九)頃刊行の『吉原つれく草』(結城屋来示著)にも記されている(二七)。吉原における座は、未知の

他者との交流を引き起こす可能性をもった場であったのである。

こういった座がとりもたれるのは、本稿で対象とする宝暦期までにおいては主に「揚屋」である。揚屋とは、客が女郎屋（遊女を抱える店）から女郎を呼んで遊興する店のことで、揚屋は客の要望を聞いて女郎屋から遊女を呼び出し、客と座敷で遊興させた。客は遊女を事前に見立てておくか、店の者に任せたり、仲間の意見によって遊女を選んだという。この揚屋に揚がることを許されたのは最高級の遊女である太夫とそれに次ぐ格子のみであったとされるが（二八）、『吉原七福神』（正徳三年〔一七一三〕刊）（鶯躍軒〔石川流宣〕著）には、「一局は客の余情によつて揚屋へいさなひける。さん茶うめ茶、此事かなはず」（二九）とあり、下位の安女郎の局（五寸二〇）なども、揚屋の酒宴に参加する機会が存在したことがうかがえる。また揚屋にあがることのできない遊女とされている「さん茶」は、寛文八年（一六六八）の江戸市中の非公許遊里の摘発に伴い、隠売女が吉原に流れ込み作り出された遊女の等級「散茶女郎」である。従来の吉原遊女に比して手軽

に遊べ、客は揚屋にあがらず女郎屋の二階で遊んだが、この二階の座敷も座が催される場となり得たと考えられる。また散茶が簡易的な揚屋の役割をした茶屋に上がり、酒宴を催し、その後客と散茶が共に女郎屋の二階へ向かうということもあつたであろう（二二〇）。先に挙げた『吉原すゞめ』や『吉原つれく草』の「座」がいずれの場において催されたものかは定かでないが、このように吉原においては種々の遊女および客を対象とし、数人で催す座の機会が存在したことが推測される。なお、そういった座の場合にはふつう客達とその相手の遊女達のみならず、太鼓持ちや芸者も同席した。

次に、こういった座における客同士の関わり合いに着目してみよう。廓に通うか否かが男性仲間の関係に影響したことは先にも述べたが、座における振る舞いも、客同士の関係に影響したようである。たとえば先に触れた『新吉原つねく草』（元禄二年〔一六八九〕刊）には、客が友とするのに悪い人物として、次のような特徴が挙げられている。

友とするにわろきもの七あり。口舌好む人、二には大よせこのむ人、三には大酒する人、四には諸分しらぬ人、五には床いそぎする人、六には飛過なる人、七には喧嘩このめる人(二三)

すなわち、①口舌(遊女との喧嘩)を好む人、②大寄(大一座)を好む人、③大酒飲み、④諸分(廓のしきたりや作法)を知らない人、⑤遊女との床入りを急ぐ人、⑥移り気で浮気な人、⑦喧嘩を好む人などが、友にすべきでない人物という。同書は『徒然草』の注釈書に擬えた遊女評判記であり、本文に頭注を加える形がとられている。本文の作者は「磯貝捨若」と称する俳諧師「磯貝舟也」、頭注者は「一代男世之助」と称する「井原西鶴」とされ、右に挙げた文は磯貝舟也による本文の部分である。磯貝舟也は静岡の出身であるが、諸国遍歴を重ねた人物で、江戸での経験をもとに吉原について文章を記し、これを大坂の西鶴を訪れた際に託したとされる(二三)。右に挙げた磯貝舟也の見解の中で、座における客同士の関係をみるにあたって特に注目されるのは、⑤床いそぎである。床いそぎ

は言葉の通り遊女と早く床入りを果たしたがることであるが、座が取り持たれた場合、客は周囲の様子をうかがいながら遊女との床入りを果たさねばならなかった。

同書の西鶴の註によると、「此里(吉原)にかよふ者、十人が九人は座興に前後をわすれ、夜ふかすも有」が、これもいつも遊べる客ならば良いが、金のない中々来れない人が「ぶらぶらと夜をふかさされ、床入ましかねけるはふびん」であるという。更に、こんな「床入ましかねける」男は、必ず女郎も振ったという。振られた男は「おきわかれても是をうらみ、さりとはむごひしかたと、人しれず男泣」し、「並木の茶屋あそびこそ、はじめから帯ときて気さんじ(気軽)也」と、気を挫かれ、再び遊郭に来なくなってしまうという(二四)。床いそぎにまつわる客の葛藤が、「並木の茶屋」(浅草、駒形橋から浅草寺正面へ向かう通りをはさむ門前町「台東区雷門二丁目」)。参詣路の両側に茶屋が並んだ。にはなく、座を伴うような遊びをする吉原ならではの葛藤であったという認識がうかがえる。右の部分は先述のとおり西鶴によって記されてお

り、必ずしも吉原の状況が如実に記されたものではなかった可能性があるが、浅草の「並木の茶屋」が登場するように、吉原として記しても違和感のない状況が記されていたことが推測される(二五)。

また西鶴による頭注では引き続き、床いそぎについて次のように述べられている。すなわち、右に挙げたように床いそぎに嘆く客がいる一方で、「折ふし爰にきて、すこし子細をしつたる人」は「さはぎの最中にそらいびきなどして、すい物の箸もとらず。おの／＼大酒無用じや、腹中は大事の物じや」などと言って抜け出すやり方を知っているが、「いな所へ知恵を出しけるは、床をいそぐと見えておかし」とあり、周囲にわかつてしまうような床いそぎが、他客の嘲笑を買ったことがみえる。しかし西鶴によると、「されども此男も笑ひがた」いものであり、「極まる所は、床入りなしに捨てかへるはおもはしからぬもの也」と、床いそぎはみつともないが、床入りを果たせず帰るのも不本意であるという見解が示されている(二六)。西鶴は同書で吉原は「酒宴をはじめとして、たはふれあそぶを第一」とする場と認めているが、やはり遊女との床

入りは多くの場合希求されたようである(二七)。遊女と馴染まないうちは店側が客と遊女を床にうながすという手順もあつたが、初回以降や大寄の場合は、客は周囲の目を気にしながら自ら床入りのタイミングをつかまなければならなかった。そのために客は、このように果たしたい目的と周囲との関係性との間にはさまれ、しばしば苦惱せざるを得ない状況にあつたのである。

座において客が他の目を意識したのは、こういった床いそぎという行為においてのみではなかった。互いの容姿や人気、遊興の態度についての優劣が争われる場合もあり、例えば先にも挙げた『吉原つれ／＼草』には、「大一座の初会」では相互に挨拶をする「盃の間」に、「我こそ夫を」などと行って遊女が身なりをつくらって客を争ったことが記されている(二八)。当然遊女に争われる客とそうでない客の間には軋轢が生じたであろうし、座に参加する前から客は互いの身なり等を意識したであろう。同書にはこれに続き、客は目当ての遊女がいるのであれば座敷に出る前に決めておくべきであるとの見解が示されており、段取りがで

きていない場合、目当ての遊女と他の客が懇意となつてしまい、自らに劣等感を抱くといった客の状況も想像されよう(二九)。

こういった客の座をめぐる客同士の問題を考えれば、座が催されるような等級の遊女に会う場合であっても、客は座には参加しないのが一番のように思われる。しかし、遊郭に通うか否かの選択同様、座に参加するか否かは、やはり客の仲間関係に影響を与えた。同書には、「すい(粋な人)は人目にはつかいか、やう成りしか共、常に心にしまりてむだづかひなし。野郎女郎の一座をせさりき。人はかたくな也とて、若き中のましはりをゆるささりき。暫くもこれなき人は、死人におなし」(三〇)と、無駄遣いをせず座に参加しない、手堅く遊ぶ「すい」な客が、若い者の付き合いかからはじかれたことが記されている。先にもみたとおり、遊郭に通う目的は最終的にはやはり遊女であったが、周囲の客との関係を断つ客は嫌厭された。仲間同士での吉原通いには煩雑な問題がつきまとつたにも関わらず、あくまで客同士の関係は重視され、多くの客は幾人かの知人と連れ立って吉原に通つたのである。

ただし、仮に客が一人で通い遊んだとしても、そこにはまだ絶つことのできない問題が存在した。それが冒頭で述べた「さし合」である。次にこのさし合いの事例を検証し、客が他の客をどのように意識し、どういった関わり合いをもつたのかについて、考察を進めていくこととしたい。

### 第三章 「さし合」をめぐる客の問題

さし合とははじめに述べたとおり、遊女の馴染み客と親しい客に、その遊女を売らないようにする廓の決まりのことである。さし合の起源は定かでないが、吉原のみならず廓関連の史料に多くみられ、広い範囲で存在し、客に共有されていた取決めと考えられる。しかしながらこの取決めはしばしば破られたようであり、遊女評判記にはさし合を破った店や遊女、そしてそれに憤慨する客の姿が少なからずみられる。たとえば吉原の散茶女郎を主な対象とした遊女評判記『山茶やぶれ笠』(延宝三年(一六七五)年刊)(山水氏頓滴林著)には、さし合を破った遊女「左京」(江戸町二丁目東

屋内) について、次のような批評がみられる。

(作者が深く馴染んでいた「左京」に対し)

予<sup>よ</sup>かとも心ふかくせられし事、いかにふちせとかはりやすきなかれの身とはいひなから、水くさい御心かなと思ふ。君ひとりのみならず、くつわ(轡)ぎう(妓夫)までと、かざる事をうらみ、あくまでなんしたけれど、まつく筆をと、む。(三二)

作者は自らが懇意にしていた遊女と友人が馴染んでいたことを知り、遊女の左京のみならず、妓楼の主人(「くつわ」)や廊の下働き(「ぎう」)までも憎いと憤りをあらわしている。他にも同様の事例は散見されるが、他にみえる事例で興味深いのは、さし合であることを承知の上でその遊女を買おうとした客がみられることである。右の引用と同じ『山茶やぶれ笠』における、「左京」と同じ店の「野分」の評である(三三)。

さるものよほとふかくせしか、まへの日太こにき

たりしおとこ、次の日ゆき、此君の御けんいらんといひければ、そのぎならばかのさまへは御さたなしと、やすくとの御うけに、此おとこおもふやうは、よもや御あいなさるましくおもひしに、あんにそういしたる御返事をうけ給り、よほといやにおもひけれども、せひなくその日は御けんに入、やとへかへり、ふかきおもはくのおとこにかくといひければ、大きにわかく、二たひ此い糸にかようましきよし。今のおとこもわれにもかくあるへきとおもひ、二たひゆかす。あまりよくふかきゆへ、おもはくのいとすちをばきりたまふ事、是そせかいのわらひくさ。(三三)

すなわち、二丁目東屋内の遊女野分に、さる客は深く馴染んでいたが、前日その客と来た太鼓持の男が次の日に野分を買おうとしたところ、「そのぎならばかのさまへは御さたなし」と問題なく買えてしまった。太鼓持は野分に会えないと考えていたので、想像と異なる返事を受けこれを嫌に思ったが、その日は仕方がないから野分に会った。宿へ帰り、野分と深い馴染み

の客にこれを伝えると、二度とその客は野分のところに通わなかった。今の男（太鼓持か）も自分に対してもこうなのだろうと、野分の元には通わなくなった。野分はあまり欲深いため却って客が切れたのであり、笑い種になった、といった内容である。

このようにさし合となる遊女をあえて買おうとする客の話は他にもみられるが<sup>(三四)</sup>、注目されるのはこゝういったさし合を破った（破ろうとした）客と客の間柄が問題になりそうな事例においても、それは問題とならず、その非難が真つ先に遊女に向かっていることである。右に挙げた評判では、とくに野分の馴染み客と太鼓持の間には上下関係があつたと推測され、馴染み客は自分よりも下の存在であろう太鼓持と同じ遊女を買おうとしたことを知り、憤りそうなものである。しかし評判自体の非難はあくまで遊女に向けられており、太鼓持と馴染み客の関係には言及がなされていない。遊女が真つ先に責められる状況は、客になることを良しとされなかつた役者を客にした場合にまず遊女が責められたという事例に酷似しており、客の忌避・拒否の経緯を考えるにあたって興味深い<sup>(三五)</sup>。しか

さし合の場合は、役者の場合とは異なり、買おうとした客と馴染み客の間に関係が形成されている。それにも関わらず、さし合をやぶられた客は何故、買おうとした客に抗議をしなかつたのであろうか。これについては改めて四章で言及するが、その理由の一つには、さし合についての他客への非難が、遊女への執着をあらわす態度とみなされかねなかつたこともあるのではないだろうか。いずれにせよこのような事例からは、客が連れ立つた場合、後にも客同士の問題が生じたであろうこと、また、仮に一人で通つたとしても、知らぬ間に廓外の友人と馴染みが重なり、それを何らかのきっかけで知り葛藤する場合もあつたであろうことが推測される。このようにみればさし合という取決めがあつたからこそ、それが破れることを通し、客同士の関係は却って複雑になつたようにも思われる。遊女が不特定多数の客をとる存在であつた以上こゝういった問題は当然生じ得るのであろうが、客は遊女をとおしても、座においても、周囲との関係をめぐる問題をしばしば抱えざるを得なかつたのである。このように種々の問題が生じたのにも関わらず、何故多くの場

合客は連れ立ち、一人で通う形式が当然とされなかつたのであろうか。最後に一人で通うことに対する考えから、客同士の間わり合いを考察してみたい。

#### 第四章 一人通いからみる吉原

これまでみてきたように、多くの場合客は連れ立って吉原に通った。しかし一人で通い、一人で遊ぶこと（以下「一人通い」と呼ぶ）を好む客もいたことは、前掲の『吉原つれ／＼草』に座興に参加しない「すい」の記述があることや、『吉原失墜』に「ある人申されしは、つれなく一人しつほりと出たるこそ、おもしろきと申されし、珍重／＼」（三六）といった記述がみられることからうかがえる。同様に一人通いを肯定する見解は、冒頭でも引用した『色道大鏡』（延宝六年「一六七八」序）にもみられる。同書は「色道」を樹立するという志のもと、畠山（藤本）箕山によって著された書である。箕山は上方出身であるが、諸国の遊郭を實見した人物であり、同書には島原を念頭においた記述が多いものの、吉原を含む多くの遊里にも言及がな

されている。その中の巻第五「二十八品」は野暮から粹となる階梯が二十八段階で記されているが、野暮から半粹に至る段階である第七暫偽品（励勤相）には、客として「粹」に一步踏み入れた段階で一人通いが行われようになることが記されている。すなわち、この段階で「一度すこしばかりの事にあへる輩」は色道に「子細あり」と考えるようになり、次第に「世間を憚り、つれをうと」む程、「戀のおく山に入」込んでいくようになるという（三七）。また同書巻第四「寛文式下」では、「高名の女郎」は突然の初めての客で、且つ連れ衆と来た客には会う必要が無いとあり（但し太鼓持ちのみ連れている場合は良い）、著者箕山はやはり仲間と連れ立たないことを「粹」な行為とみなしているようである（三八）。箕山は他の客と馴染むことの弊害も記しており、巻第五「廿八品」の第廿等賤品には、廓遊びを長くすると「いかなる高貴、福人も」皆お金を使い果たし「其身いやしきにおちいる」から、「野卑雑人」なども無理に親しんで来て煩わしく、更に関係を切れずにそういった客と親しんでしまうと、人目に恥ずかしく後悔が募る、と嫌な客とも繋がって

しまう廓の状況が垣間見られる(三九)。このとおり『色道大鏡』からは、一人通いが「粹」であるのみならず、弊害に対する理に適った行為であったことがわかる。それでは、このように一人通いを評価する見解がある一方で、それが必ずしも当然のこととして受け入れられなかったのは何故なのであるか。

そもそも客が連れ立った理由としては、第一章で見たとおり、廓通いが日常的な付き合いのもとに行なわれたこと、またそういった付き合いを拒否するか否かが男性同士の仲間関係に影響したこと等が考えられる。それに加え、高級遊女に初めて会う際に紹介者が必要であったこと(四〇)、また廓の慣習に疎い客の場合、それをよく知る人物と共に通った方が都合が良いといった、必要に迫られた事情も存在したことが推測される(四一)。しかしこれらの事情が、一人通いを肯定しない態度につながったとも考え難い。

これまでみてきた史料の記述から考えるに、一人通いが否定されたのは、それが理に適う行為であった反面、同時に箕山の言う「戀のおく山に入」ること、すなわち真剣に遊女に相對する行為として捉えられたこ

とがあつたのではないだろうか。長崎の丸山遊郭を主な対象とする『長崎土産』(延宝九年(一六八一)刊)(悪性大臣嶋原金捨跋)にも、「あまたつれ衆もともなハ」ないことは粹(「甘膚」)の行為であるが(四二)、遊女が客に実のある場合は客が連れや太鼓持と共に来ることを嫌がる(四三)、一人通いが遊女との真剣な付き合いを思わせる行為であつたことがうかがえる。先述の『吉原つれ／＼草』(宝永六年(一七〇九)頃刊)には「た、真実に逢てくる、のひとりは、いかふ有かたきみそ」(四四)と遊女にとって真剣な客は有難いといったことも記されているが、同時に「遊女に深く契らん人にく／＼すみやかに切べし。誰をかはぢ、誰にか知られん事を願はん。ひとり客(遊女が他になじみを作らず特定の一人のみを客とすること)に成なん事、またそしりのとなり」(四五)ともあり、真剣な客は遊女にとつては良い客であるものの、他の客から見ればそのような客は「すみやかに切べ」き存在とみなされたことがうかがえる。だからといって様々な遊女と付き合う客も嫌厭されたが(四六)、いずれにせよ遊女に深く契る客が肯定され難かつたことは、何故多く

の客が連れ立ち廓に通ったかの一つの解になるであろう。すなわち、客の連れ立ちには遊女に深入りし身を滅ぼさないようにするための方策、あるいは深入りしていいないことを周囲に表明するための態度として、一つの意味があったと推測できるのである。第三章で論じたさし合において、さし合を破られた客が他客に抗議しない理由も、同様に遊女への執着をみせないためであったと考えることもできるであろう。

以上のように一人通いを解釈した時、客が連れ立って通う行為は、すなわち客と廓外を結びつける論理であったとみることが出来る。一人通いは『吉原つれ／＼草』にあるように、無駄遣いをしないで済むといった意味において、一見廓外の論理に則ったあり方である。しかしその節約はあくまで遊郭に長く通うための方策であり、つまりは廓内に入り浸り「戀のおく山に入」る行為である。一方、廓外の知人であれ廓内でも知り合った客であれ、誰かしらと連れ立てば、それは廓外の日常を思い出す契機となり、客は廓外の日常につながるためであらう。もともと、連れ立った理由の全てがそれであり、また客が自覚的であったとは

思われぬが、様々な不自由さを感じながらもあえて連れ立った要因の一つとして、このような日常から逸脱し過ぎないようにする構えの態度が根底にあったことが推測されるのである。

こういった推測に基づけば、『色道大鏡』等に見られるような「粹」な態度としての一人通いは、客を廓外から切り離そうとする論理であらう。もつと言え、一人通いは「粹」という廓内の遊興規範を用いなければ、肯定され得なかつた態度なのである。このような「粹」なあり方のみに注目すれば、廓は確かに「現実を遮断した特別な社会」である。しかしこれまでみてきたとおり、それはあくまで廓の一側面である。廓の内外をつなぎとめておこうとする態度は、客が連れ立ち、一人通いを肯定しないという行為の中に見出すことができる。

## おわりに

以上、本稿では宝暦期までの新吉原を主な対象とし、客同士がどのように互いを意識し、どう関わり合

いをもったかについて、遊女評判記の記述に基づき議論を行なってきた。吉原はふつう見知った人間と連れだつて通う場であつたが、客が足を踏み入れるのは必ずしも本意ではなく、周囲との関係性による、やむを得ない選択の場合もあつた(『吉原すゞめ』)。また酒宴の座は普段知り得ないような客同士が出会う場ともなり得たが、一方で互いの行動や容姿の評価が行われる場でもあり、客は遊女と本来の目的を果たすにあつても、周囲の目を意識せざるを得なかつた(『吉原すゞめ』『吉原つれ／＼草』)。これは気軽に遊べる茶屋とは異なる吉原特有の問題であり(『新吉原つね／＼草』)、また連れ立つて通うからこそ起きた問題でもある。これらのことを考えれば、客は吉原へ一人で通うことが最も良いように思われる。しかし仲間と連れ立たないような客は、吉原に通わない者が仲間内から外された(『吉原すゞめ』『難波物語』)のと同様に、仲間関係からはじかれた(『吉原つれ／＼草』)。但し、仮にそのような周囲の目を無視し一人で通つたとしても、「さし合」という避けることのできない問題は存在した(『山茶やぶれ笠』)。さし合は表面上客と遊女

の問題として扱われたが、実際は見知つた客同士の問題である。客は吉原において、遊女を間にはさむ形でも、酒宴の座でも、常に他客との関係を意識せざるを得ない状況にあつたのである。吉原はこのために、余計に客同士の問題が生じやすい場となつていたとも考えられる。一部の客の拒否や忌避は、吉原が他の客に目の行くような構造であつたからこそ、生じた状況と推測することもできるであろう。

このような状況があつたにも関わらず、一人通いが必ずしも肯定されず、客が連れ立つたのは何故であろうか。これは四章で論じたように、遊女に入れ込んでいないという態度の表明が、その要因の一つにあつと考えられる。勿論、一人ではつまらない、男性仲間同士のその場の勢いで、という単純な理由もあつたであろう。しかし、深く遊女に契る客と付き合いを絶つべしという意見がみられたことから(『吉原つれ／＼草』)、客同士の間では遊女に入れ込むべきでない(そのように見られてはならない)との意識の共有がある程度あつたことが推測される。遊女に嵌まり身を滅ぼすことから「身を守ろう」とする意識が、連れ立ちに

は含有されていたということである。こういった客のあり方は、すなわち客と廓外を結びつけるあり方であり、廓は「現実を遮断した」場というよりは、むしろ廓外の論理がうまく隠されながらも用いられた場であったということができよう。今後は更に客のあるべき(とされる)姿に注目し、廓内と廓外のあり方がどのように関わりあっていたかについて、なお検討を深めていくこととしたい。

## 註

- (一) 新版色道大鏡刊行会編『新版色道大鏡』(八木書店、平成十八年)、三五頁
- (二) 西山松之助『近世風俗と社会 西山松之助著作集 第五卷』(吉川弘文館、昭和六十三年)、七四―七五頁
- (三) 拙稿「吉原における客の身分―遊女評判記を中心に―」(『常民文化』三十八号〔平成二十七年三月〕、成城大学常民文化研究会、一八七(二七)―一五四(五三)頁)
- (四) 拙稿「吉原と役者―遊女評判記を中心に―」(成城大学大学院修士学位論文・未刊行)、一―五一頁、平成二十六年
- (五) 遊女評判記のより詳細な説明としては、小野晋『近世初期遊女評判記集(研究篇)』(古典文庫、昭和四〇年)、中野三敏「遊女評判記と遊里案内」(『国文学』解釈と教材の研究)第九巻第二号〔昭和四〇年一月〕、学燈社)、および拙稿(前掲註三)を参照のこと。なお評判記の数は、特に野間光辰による「近世遊女評判記年表」(『日本書誌学大系40 初期浮世草子年表・近世遊女評判記年表』青裳堂書店、昭和五十九年)をもとに計算した。但し野間氏の年表作成時と現在の伝存状況には若干の違いが認められるため、その違いを反映した。また伝存状況が不明のものもあるため、おおよその数で記した。
- (六) 吉原の客層については三田村鳶魚「傾城買の二代派別」(『江戸時代のさまざま』博分館、昭和四年)、「吉原一夕話」(『吉原に就ての話』青蛙房、昭和三十一年)において、遊女評判記の作者については、宮本由紀子「遊女評判記」について「吉原細見」以前、「地方史研究」第四一巻六号(平成三年十二月)、地方史研究協議会、六八―六九頁)、野間光辰「浮世草子の成立」(『西鶴新致』筑摩書房、昭和二十三年、一三―一四頁)等で考証がなされているが、より詳細な検討を行いたいと考えている。
- (七) 江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊 第一巻』(八木書店、平成二十二年)、一九六頁
- (八) 江戸を対象とした評判記の隆盛は万治以降、寛文頃からであ

り、それ以前は上方を対象とする評判記が殆どを占めた。なお本書『吉原すゝめ』は廓の作法を伝授する諸分秘伝物である。吉原を対象とした諸分秘伝物は数が少なく、また本書に先行する諸分物『吉原鑑』（万治二年刊）が鳥原の『ね物がたり』（明暦二年刊）の改竄本であることから、本書は初期の新吉原を知る上で貴重である（同右、四九四頁）。

(九) 前掲註七、二〇〇頁

(一〇) 前掲註七、一九七・二〇〇頁

(一一) 前掲註七、一九七頁

(一二) 野田壽雄校註『仮名草子集（上）』（朝日新聞社、昭和四十七年）、三〇六頁。なお括弧内の註も同書の註を参考にした。

(一三) 小野『近世初期遊女評判記集（研究篇）』（前掲註五、一四八頁）

(一四) 江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊 第二卷』（八木書店、平成二十二年）、二三四―二三五頁

(二五) 本書は執筆の意図は「水（粹）にいたる所をすゝめ」る先書『よしはらつれく草』（伝存不明）を抄し註を付すことである。「序」にあり、当人たちも粹がわかる人物であったことが推定される（同右、二二七頁）。

(二六) 前掲註七、二〇六頁

(二七) 江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊 第四卷』（八木書店、

平成二十三年）、三九五頁／著者結城屋来示は吉原一丁目の妓楼「ゆうきや又四郎」で、俳人宝井其角の門人。以上の著者情報および刊行年については同書、五一六頁に依った。

(一八) 西山松之助編『日本史小百科 遊女』（東京堂出版、昭和五十四年）、二六頁

(一九) 前掲註一七、四三九頁

(二〇) 揚げ代が銀五匁の安女郎。『吉原大鑑』（天保五年序）によると、二寸・三寸局もいたが、宝永年中には途絶えたという。また京都には「八寸」もあり、八匁で揚屋入りが許されたと『吉原つれく草』にはある（前掲註一七、六五頁）。

(二一) 散茶は遊女屋の二階で遊ぶ「内留」とされるが、宝永六年頃成立『吉原つれく草』には「さん茶も、ふたりかふるなとつれて、ちや屋へ出たるきばらし、ゆ、しと見ゆ」（前掲註一七、二八五頁）とある。宝暦以後に茶屋が揚屋の代わりとなり、遊女が茶屋まで客を送迎し、枕は許されないものの酒宴に侍座したことを考えれば（『近世風俗志（守貞謄稿）（三）』岩波文庫、平成十一年、三五五頁）、宝暦以前から散茶が茶屋で酒宴を催したことが想像される。

(二二) 前掲註一七、九八頁

(二三) 前掲註一七、五〇八―五〇九頁

(二四) 前掲註一七、一〇一―一〇二頁

(二五) この『新吉原つねく草』と西鶴については野田寿雄「新吉原常々草」(『国文学 解釈と鑑賞』二五卷十一号〔昭和三十三年十月〕、至文堂、四九―五二頁)等に詳しくまとめられている。野田氏は西鶴がかつての江戸旅行思い出しか頭註に手を付けたものと推測しており、本書が西鶴の吉原についての造詣や批判をくわしく知る上に最も有力な材料であろうという見解を示している。

(二六) 前掲註一七、一〇二頁

(二七) 前掲註一七、九九頁／もちろんこれには個人差があったと考えられ、『吉原大全』(明和五年刊)などには、女郎にかまわない「吉原ずき」の客の記述がみられる(江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊第五卷』八木書店、平成二十三年、四二五頁)

(二八) 前掲註一七、三五二頁

(二九) 他に座において周囲の目を気にする例としては、大坂の諸分秘伝物『色道諸分難波鉦』(西水庵無底居士著・延宝八年序)に、田舎侍の客は馴染むにはいいが、粋の大寄せの場では遊女が引け目を感じるといったことが記されている(中野三敏校注『色道諸分難波鉦』岩波文庫、平成三年、二九頁)。

(三〇) 前掲註一七、三三四頁

(三一) 前掲註一四、四一三頁

(三二) 前に挙げた「左京」(前掲註三二)とこの「野分」は、所属について「二丁目あつまや内」(左京)、「式丁目東屋内」(野分)と記述が異なっており、評の順番も離れているが、「左京」は評判記の最後に載り、作者が「此巻にかきくわへよ」と後から思ったことが記されているため、両者が同じ店「江戸町二丁目東屋内」の所屬と捉えた。

(三三) 前掲註一四、三九二―三九三頁

(三四) 家満・信正・庚実著「吉原局惣鑑」(延宝三年刊)(新町九兵衛内「右京」評)など。

(三五) 拙稿、前掲註三

(三六) 前掲註一四、二三四―二三五頁

(三七) 前掲註一、一六六頁

(三八) 前掲註一、一五五頁

(三九) 前掲註一、一九二頁

(四〇) 暉峻康隆「付録 遊里の人と生活」(『現代語訳 西鶴全集 第一巻 好色二代男』(小学館、昭和五十一年)、二九九頁)

(四一) 同右、三〇二頁

(四二) 丹波漢吉校注『長崎文献叢書第二集第四巻 長崎土産・長崎不二賛・長崎萬歳』(文献社、昭和五十一年)、四〇頁／なお本書は長崎を対象とするが、著者「前悪性大臣嶋原金捨」は京都の出身で、鳥原をはじめとした遊郭各所で遊んだ人物と

ある（同書、十一頁）。

（四三） 但し、このように客が連れや太鼓持と共に来ることを嫌が  
るのは、客に真剣であるようにみせる遊女の手管の場合も  
あったという（同右、五五頁）。

（四四） 前掲註一七、二八八頁

（四五） 前掲註一七、三〇三頁／なお「に」および「と」に付した  
（ママ）は『江戸吉原叢刊 第四卷』（前掲註一七、三〇三頁）  
に依るが、これは当該箇所が「人にくすみやかに切べし」  
および「ひとり客に成なん事、またそしりのとなり」では意  
味が通らなくなるためと推測される。本稿ではこれに則り、  
且つ上野洋三校註『吉原徒然草』（岩波文庫、平成十五年、五  
五頁）を参考とし、前者は「遊女に深く契る人とは関係を切  
るべき」、後者は「一人客に成事はまた誇りのもとである」と  
解釈した。なお上野校註『吉原徒然草』において当該箇所は  
「遊女に深く契らん人、またくすみやかに切べし」、「ひとり  
客に成なん事、亦そしりのもととなり」とされている。

（四六） 前掲註四二、四二頁